

# 琉球大学学術リポジトリ

## Victoria university of Wellington での日本語教育実習報告

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2012-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 春菜, Nakamura, Haruna メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/24139">http://hdl.handle.net/20.500.12000/24139</a>

## Victoria university of Wellington での日本語教育実習報告

中村 春菜

### 1. はじめに

2009年2月から同年10月までの約8ヶ月間、琉球大学からニュージーランドの首都ウェリントンに位置する Victoria university of Wellington (以下、ヴィクトリア大学と表記する) の日本語プログラムに日本語教育実習生として派遣された。同校の同プログラムでは、毎年日本の大学の大学院生1名を日本人チューターとして受け入れており、その制度は20年以上も続いている。そのような伝統的ともいえるプログラムに、2009年度の実習生として日本語教育にたずさわる機会を得た。筆者の専門は中琉関係史で、琉球大学で学ぶ留学生の生活や学習の手伝いをするサポーター役、会話パートナー、教師の補助などの経験はあったものの、日本語教育について体系的に学んだことがなく、不安な、しかし海外でのチューター生活への期待を抱きつつスタートを切った。8ヶ月間、異国の地でチューターを通して学んだこと、また一個人として学んだことを報告する。

### 2. 首都ウェリントンについて

ニュージーランドは北島、南島の主要2島及び多くの小さな島から成り、首都ウェリントンは北島の最南端に位置する街である。国会議事堂やメインステーション、港、博物館等の公共機関のみならず、植物園や繁華街、劇場等の娯楽施設まで、たいていどこへでも歩いて行けるほどコンパクトにまとまった街で、30分



国会議事堂

も車を走らせば郊外で羊の群れをみることも珍しくはない。街にある小高い丘 Victoria mountain からはウェリントンの街並みが一望でき、「風光明媚」という言葉が正に当てはまる。またウェリントンは「風の街」の異名を取るほど海風(冬は南極

から吹き寄せる季節風) が非常に強く、最初に訪れた者はその大風に少なからず驚かされるようだ。

### 3. 日本語プログラム

ヴィクトリア大学は1897年に開校され、日本語プログラムは1989年に設置された。2009年度1学期は、3人の専任講師と5人の非常勤講師(日本語教育実習生も含む)、2学期は、2人の専任講師と4人の非常勤講師(日本語教育実習生も含む)がおり、学生数は1学期が約200名、2学期が約180名であった。また、ヴィクトリア大学は世界各国の大学とも交流協定を結んでおり、日本語プログラムにおいても学生間の交換留学が盛んである。2009年度時点で、大阪外国語大学、関西大学、国際教養大学、同志社大学、明治学院大学などの大学と提携しており、2010年には新たに琉球大学とも交流協定が結ばれた。

学生は週に2度の講義と週に1度のチュートリアルを履修することが必須となっている。また、授業は日本語専門の科目以外にも、日本のドラマや映画などを教材にして日本やアイヌ、沖縄文化へ理解を深めていける内容も設けられていた。

表1は、2009年度に開講された授業の一覧表である。

表1 2009年度日本語関係科目一覧

100-Level Courses	
JAPA 111	Introduction to the Japanese Language
JAPA 112	Elementary Japanese
JAPA 115	Japanese Language 1A
JAPA 116	Japanese Language 1B
200-Level Courses	
JAPA 202	Japanese Language 2A
JAPA 203	Japanese Language 2B
300-Level Courses	
JAPA 301	Japanese Language 3A
JAPA 302	Japanese Language 3B
JAPA 321	Modern Japanese Literature
400-Level Courses	
JAPA 401	Advanced Japanese Language
JAPA 404	Japanese Intellectual History
JAPA 405	Special Topic

授業番号が上がるにつれ日本語のレベルも上がっていく。1学期は，Japa111，Japa115，Japa202，Japa301，Japa404の5つのクラスが開講され，残りのクラスは2学期目の開講である。また，400-Level Coursesはオナーズ（日本で言うところの，論文を書くためのコース）の授業で，さらにレベルの高い講義が全て日本語で行われる。

#### 4. 日本語教育実習

##### 4.1. 担当した授業

担当した授業は学部生のためのチュートリアルで，100-Levelから300-Levelの学生の指導にあたった。チュートリアルの内容は，講義を担当している専任講師と相談し，チュートリアルの授業内容や指導方法等さまざまなアドバイスをいただきながら決めた。

表2及び表3は，担当したチュートリアルの時間割である。

表2 2009年度1学期（3月～6月） チュートリアル時間割

	月	火	水	木	金
10：00～10：50	JAPA 202		JAPA 115		
11：00～11：50					
12：00～12：50				JAPA 301	
13：10～14：00	JAPA 202		JAPA 115	JAPA 301	JAPA 111
14：10～15：00	JAPA 202		JAPA 115	JAPA 301	JAPA 111
15：10～16：00					JAPA 111

表3 2009年度2学期（7月～10月） チュートリアル時間割

	月	火	水	木	金
10：00～10：50	JAPA 203				
11：00～11：50			JAPA 116		
12：00～12：50				JAPA 302	JAPA 112
13：10～14：00	JAPA 203		JAPA 116	JAPA 302	JAPA 112
14：10～15：00	JAPA 203		JAPA 116	JAPA 302	JAPA 112
15：10～16：00					JAPA 112

チュートリアルは講義で学んだことを実践する場で，原則として少人数制である。しかしながら，基礎科目であるJAPA 111は授業登録している学生は多かったがチュートリアル・クラスが少なく1クラスの人数が20名近くになってしまった。しかし，一人ひとりの学生と向き合うスキルが得られた。



#### 4.2.1. JAPA111/112 チュートリアル

- ① 期間：JAPA 111 (1 学期), JAPA 112 (2 学期)
- ② 対象：初級前半レベル。特に JAPA 111 は日本語初心者 of 学生。JAPA 112 は JAPA111 を履修済みの学生, またはそれに相当するレベル of 学生。
- ③ 教科書：『初級日本語げんき I』(The Japanese Times)

④ チュートリアル of 内

容：ほぼ毎回, 講義 of 始めに 10 分程度 of 小テスト (ひらがな, カタカナ, 漢字など) を行い, その間に講義で課された宿題 of チェックを行う。その後, 教科書 of 「読み書き編」に入る。チュートリアルは主に講義で習ったこと



JAPA112 の学生たち

とを実際に使うこと

によって身につけることを目的としている。初めて触れる日本語に親しみを持ってもらい, 楽しく学習ができるよう多彩なゲームを取り入れた授業内容であった。また, JAPA 112 からは約半数 of 時間を同じ建物の 1 階 of LL ルームでコンピューターを使用した授業も実施した。コンピューターを使って, 単語 of イントネーションを真似たり, 質問に答えたりと CALL 形式 of 授業であった。コンピューターを利用した授業であっても, 全てをコンピューター学習にするのではなく, 学生と向き合ったチュートリアル of 時間も設けた。また, 両学期にそれぞれ 2 回 of オーラルテストを実施した。

- ⑤ クラスの様子等：JAPA 111 は初めて日本語を履修する学生が圧倒的に多く, その数は約 120 名余りであった。JAPA 112 は JAPA 111 から引き続き履修する学生や, 以前に少し習ったこと of ある学生もおり, その数は約 70 名であった。

日本語を始めて勉強する学生たちが相手なので, 多少英語を使って of 指示や説明を要したが, 大方はゆっくり話したり, ジェスチャーを交えて話したりすることによって意思疎通は図れたと思う。また, ほとんどの学生が毎回まじめに宿題

をやってきており，質問もその場で受け付けることもあったのが，大いに關心した点である。また，この学年の1年間の成長は目を見張るものがあり，週ごとに日本語だけで会話ができる時間が長くなり，より積極的に私に話しかけてくる姿を間近で見ることができたのは，本当に嬉しかった。「教師冥利につきる」とはこの時の気持ちを表現したものといえよう。

#### 4.2.2. JAPA115/116 チュートリアル

- ① 期間：JAPA115（1学期），JAPA 116（2学期）
- ② 対象：初級後半レベル。JAPA 111，JAPA112を履修済みの学生，またはそれに相当するレベルの学生（主に，高校で日本語を履修していた学生で，大学入学後，引き続き日本語を履修する者）。
- ③ 教科書：『初級日本語げんきⅡ』（The Japanese Times）
- ④ チュートリアルの内容：このクラスを履修する学生は最低でも1年間日本語を履修しているため，ある程度聞くこと，話すことができる。毎回，授業の冒頭部分で聞き取りの練習の目的で5分ほど，筆者の先週末の出来事や，イベント参加の感想，また将来のことなどトピックで話した。続いて口慣らしのため10分ほどの時間をとり学生に前週の出来事やバイトの様子などを話してもらった。こうすることで，普段日本語を話すことに多少抵抗を持っている学生も，あまり文法や単語を気にせず話したいことを日本語で話す練習になる。チュートリアルの一番の目標は，日本語を使うことであつたため，この方法はある程度効果があつたのではないかと思う。また学生の1週間の様子やプライベートな時間のすごし方を知ること，趣味や共通点など見つけるきっかけ作りにもなつた。この15分間の「ミニ発表」は，115-Level以上のチュートリアルで時間の許す限り必ず設けた。

また，この学年では日本文化に基づいたトピック（満員電車や俳句など）で文法や単語等を勉強していたため，チュートリアルでも日本文化を可能な限り体験させるように努めた。例えば，「満員電車」の回では，満員電車を体験したことの無い学生のために，まず youtube で満員電車の様子を見せ，次に予め用意しておいた紐で直径1メートルの円を作り，その中に受講者全員（15名ほど）入れ，日本の電車の込み具合を体験させた。このアイディアは学生の理解を深めるのに役立った。他にもドラえもん回では，「あつたらいいな」と思うドラえもんの道具を絵に描き，その説明文を日本語で書かせ発表させた。講義を受け持つ教員と相



談をしながら、授業計画を自由に立てることによって、アイデアが次々に湧き出る面白みのあるチュートリアルができた。

- ⑤ クラスの様子等：約 70 名の学生が登録し、1 学期は 4 クラス、2 学期は 3 クラスであった。筆者は 1 学期 3 クラス、2 学期は全クラスを担当した。②の「対象」の項でも述べたが、このクラスは大学で初めて日本語を履修した学生と、高校で日本語を履修していた学生の 2 つのタイプの学生がいる。日本語レベルの差が一番開



JAPA116 の学生たち

いているのがこの学年で、チュートリアルをする際に最も気を使う学年でもあったが、学生同士が自主的に教え合うなど、学生相互に協力していた。

また、この学年以上は一学期に一度ドラマ・テストがある。ドラマ・テストは学生自身がオリジナルの脚本を考えたり、実際の海外ドラマを日本語訳したりして、全て暗記した上で演技をする。チューターと講師で、脚本の日本語をチェックするのだが、ドラマのアイデアや衣装等全ての準備は学生の自主性に任せる。学生も他の授業などで忙しい中、このドラマ・テストには熱心に取り組んでいた。普段日本語での会話を苦手としている学生から、このドラマを通して自信をつけることができたという感想があった。このように、ドラマ・テストは学生の心理的な側面にもプラスの効果があった。

#### 4.2.3. JAPA201/202 チュートリアル

- ① 期間：JAPA 202 (1 学期)、JAPA 203 (2 学期)  
② 対象：中級レベル。JAPA 115/116 履修済みの学生、またはそれに相当する日本語レベルを有する者。  
③ 教科書：『中級の日本語』(The Japanese Times)  
④ チュートリアルの内容：この学年も、講義で習った文法や語彙の定着を図るため

のチュートリアルを行った。この学年になると、日本語で会話をするのにほとんど不自由なくなり、また日本語学習に意欲のある学生が多く、冗談が通じるレベルに達している。恒例の「口慣らし」の時間が終わると、教科書の「運用練習」で学生同士のロールプレイや、ディスカッションを中心にチュートリアルを行った。作文を書く際にも、辞書をひきながら、未学習の単語や文法などを多用するなど、意欲の高い学生が多かった。またこの学年は隔週でビデオ鑑賞及びディクテーションが組まれており、1学期目はアニメ『ゼロ弾きのゴーシュ』（1982）、2学期目は映画『Shall we ダンス?』（1996）を教材として用いた。字幕も無い映像で、聴解をしながら予め配布した穴埋めシートに記入していくタスクをさせる。普段見る機会の少ない日本の作品、しかも文学的要素の強いアニメや映画が視聴できる機会があるのはとても良いと思った。



JAPA203 の学生たち

- ⑤ クラスの様子等：約40名の学生が登録し、1学期、2学期共に3クラスが開講され全てのチュートリアルを受け持った。この学年は、前年に引き続き日本語の授業を取っている学生が多かったため、ほとんどの学生が顔見知りで、他の学年に比べるとチュートリアル開始時期からクラスメート同士が打ち解けている印象を受けた。また、授業終了後も筆者の研究室に話をしに来たり、宿題を見せに来たりする学生が多かった。

特筆すべきこととしては、このレベル以上で、やる気のある学生とは交換日記を行ったことである。これはある程度余裕のできた2学期から始めたことだが、学生の様子をより一層把握したいという気持ちと、作文（日本語）を書く力の一助になればと思い始めたものである。この学年は10名ほどの学生が進んで交換日



記を書いてくれた。中には、「ここだけの話だよ。」とか「秘密の話ですが…。」といった内面を明かす機会としてとらえて書いてくれる学生も少なくなく、交換日記は heart to heart の交流を実現してくれる方法であった。

#### 4.2.4. JAPA301/302 チュートリアル

- ① 期間：JAPA 301 (1 学期), JAPA 302 (2 学期)
- ② 対象：中上級レベル。JAPA 202/203 を履修済みの学生、またはそれに相当する日本語レベルを有する者。
- ③ 教科書：『文化中級日本語Ⅱ』（文化外国語専門学校）及びヴィクトリア大学オリジナルテキスト
- ④ チュートリアルの内容：約 30 名の学生が登録し、計 3 クラスを受け持った。この学年になると留学経験者もクラスの半数を占め、ほぼ日本語で受け答えをする。この学年のチュートリアルでは毎週一人ずつ自由なトピックで発表をする。例えば「家族の歴史」、「魚は宇宙人?」、「味覚について」、「日本留学」など、実にバラエティに豊んだ内容のスピーチが展開された。学生は原則 1 週間前に筆者に原稿を提出し、一緒に意味等確認をしながら日本語を校正した上で、パワーポイントを作成し、できるだけ暗記してスピーチに臨む。スピーチが終わると、学生一人ずつにコメントや質問等を促し、全員が日本語が話せるよう努めた。授業終了後に、評価シートを記入し、発音のチェックや単語の使い方などを指摘した上で、コメントを書いて返す。

スピーチが終わると、主にオリジナルテキストを用いて毎回異なるトピックを題材に自由討論の形式で学生同士、また学生と筆者で会話を繰り広げた。トピックは「卒業」や「初めてのデート」、「旅行」「料理」などであった。このオリジナルテキストはトピックに関連した文法や新出単語が提示されているため、学生も楽しく単語等が覚えられたと思う。また、この学年になると、日本で流行しているものや言葉なども合わせて紹介した。その当時、日本で流行していた言葉が「草食系男子」「肉食系女子」であったので、インターネット上に掲載されていた「草食系男子度」と「肉食系女子度」を測る心理テストを教材に使用し、盛り上がった。中には、心理テストに出てきた単語を熱心にノートする学生もおり、その姿を見て、やはり語学学習は「楽しさ」が不可欠な要素なのだと改めて気づかされた。

- ⑤ クラスの様子等：この学年も日本語が大方通じるということで，最も自由自在に日本語の難易度を調整できる学年であった。この学年になると，他の授業で忙しい学生が多かったが，大学生として自分の専門に探究心を持って勉強に励む姿が印象的であった。また，留学経験のある学生からは，筆者が訪れたことの無い日本本土の各地の様子を聞くことができ，たいへん勉強になった。

この学年では交換日記以外にも，時々放課後に日本語能力試験の準備のための勉強会を毎週開いた。

#### 4.3. チュートリアル以外の時間

チュートリアル以外の時間は，授業準備や小テストの採点，講師の先生方とのミーティング，また来訪してくる学生の相手をするなどしていた。交換日記が始まると，その日本語のチェックやコメントの記入などの時間にも充てた。

また，地質学を専門にしていらっしゃった先生とも，日本語能力試験の勉強会をした。全く異なる専門の先生が一生懸命日本語を学んでいる姿を間近で見ることで，筆者自身にも語学に対する探究心とより良く日本語を説明したいという気持ちが湧いてきた。またある時には，その先生の基調講演にも招かれ，ヴィクトリア大学のアカデミックな雰囲気を存分に感じ取ることでできる貴重な体験をさせていただいた。

それと，沖縄文化を紹介する目的で，毎週土曜日の午後に，ウェリントン在住の空手に興味のある社会人（日本人・NZ人）を対象に空手クラスを開いた。少人数ではあったが，日本人とNZ人のちょっとした架け橋になれたこと，また沖縄の伝統の空手を体験し，理解してもらえたのは，ウチナーンチュとして文化交流の使命をも果たすこととなった。貴重な体験である。

#### 5. おわりに

ヴィクトリア大学でのチューターとしての日々は，私の人生で大きな糧となる，かけがえのないものである。日本語・日本文化について詳しいわけでもなく，ましてや日本語教育を専攻しているわけでもなかった筆者にとって，ヴィクトリア大学での日本語チューターの経験は，大きな冒険でもあった。

先輩方もおっしゃっていたが，当初緊張するのはみな同じで，「チューターとして，何が求められているのか」を認識し，その役割を確信した時に初めて楽しくやれるという状況ができる。その状況をつくりだすためのエッセンスはなんといっても，ずっ



と支えてくださった先生方，そして学生に他ならない。ヴィクトリア大学の日本語プログラムが 20 数年にもわたって，わざわざ日本の大学から教育実習生を受け入れている一番の理由は，「学生たちが日本語で気負いなく話せる人」が必要だからであろう。ヴィクトリア大学には言うまでもなく素晴らしい先生方がいらっしゃるが，日本の大学生を招聘しているのは，ヴィクトリア大学の学生にとって「気軽に日本語で」話ができる同年代の者がより適しているからである。好きな音楽を音楽好きな学生と共有したり，理想の男性や流行りのドラマの話題で盛り上がったりと，ヴィクトリア大学の日本語プログラムで筆者にしかできないことを見つけた時，派遣していただいた（採用してくださった）意義が深く理解できた。

授業外でも一緒に街へ繰り出して遊んだり，映画を見たり，カフェに行っておしゃべりしたり，ここでは全てを書き表すことができないほど，変化に富んだ，しかしながら大切な一日一日を元気に楽しく過ごすことができた。

帰国後の今も学生たちとは，メールや facebook, MSN 等でやりとりをしたり，Skype を使っておしゃべりしたりと，交友がある。また 2010 年 10 月 1 日現在で，計 4 名の学生が沖縄まで遊びに来てくれた。ニュージーランドから距離的に非常に遠い沖縄まで足を伸ばして会いに来てくれたことは，筆舌に尽くし難いほど嬉しかった。またウェリントンで仲の良かった日本語プログラムの卒業生 3 名が JET プログラムで日本に来ており，彼らとも再会を果たすことができた。

このように，8 ヶ月の短い時間であっても，その関係をずっと保ち続けていけるのは，本当に嬉しいことである。そして，私がチューターをしていた時に琉球大学とヴィクトリア大学の交流協定が結ばれたこともまた，長年の夢が叶ったかのような嬉しさである。今後も，ますます琉球大学とヴィクトリア大学の交流が盛んになることを，心の底から望んでいる。

最後に，このような素晴らしい経験を与えてくださったヴィクトリア大学の伊藤雄志先生と琉球大学の金城尚美先生に心より感謝を申し上げます。いつもご助言くださり元気付けてくださった狩野不二夫先生，また右も左も分からない私をいつも丁寧に指導してくださったアンドリュー・バーク先生，公私ともに支えてくださった光恵 Sandom 先生，的確な教材づくりから生活のアドバイスまでしてくださった浦野千春先生，作文の指導方法を教えてくださった天野まり先生，そして大学院での私の指導教員である赤嶺守先生に厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

(琉球大学人文社会科学研究所修士課程)